

はじめに

1. 日本語を母語としない中学・高校生の現状

グローバル化が進行する中で外国人の定住化が進み、その子どもたちが公教育に占める割合も増え、特に在籍期間「2年以上」の児童生徒数が増加し続けています¹。それに伴い、日常会話には不自由しないが、教科学習のために必要な言語の習得が不十分な生徒が多いと、現場の日本語指導者や研究者たちから報告されるようになりました。

学習言語能力の重要性が広く話題にのぼるようになりましたが、学習言語能力そのものの実態はまだよくわかっていません。人間の複雑な認知活動を、学習言語能力の言語活動と生活言語能力の言語活動とに簡単に峻別できるものではないからでしょう。Cummins は「学習言語能力とは、学習を実際に行っている文脈においてこそ機能する能力である」としていることから、単に教科の内容に関わる語彙や表現に熟達するということではなく、「学習場面で情報収集をしたり、情報を提供したり、比較・分類・推測などを行う認知的能力を果たす力」²であると筆者も理解しています。

日本語を母語としない生徒たちの学習言語能力を育成するため、『学校教育における JSL カリキュラム』が文科省によってまとめられたり、「内容重視のアプローチ」のある意欲的な授業が各地で実践されたりしていますが、中学高校生の場合、それらを補完するものとして、母語力を利用して自学自習できる教材が必要だと考えます。

というのも、現在、20,692 人の日本語指導が必要な児童生徒が、小中高あわせて 5,281 校の学校で学んでいます。その 49% が在籍数 1、すなわち日本語が不十分な生徒はその学校でたった一人だけという状況でありますから、先のカリキュラムや授業の恩恵にあずかれる可能性は非常に低くなると言わざるを得ないでしょう。また、有本(2004)³によれば、日本語指導にあたっている「正規の教員」の 1/3 は指導経験が 1 年で、その数がもっとも多く、JSL カリキュラムを限られた時間にどのように行えば良いか模索中の教師も多く、専門性を兼ね備えた教師はまだ少ないというのが現状です。

2. <学習語彙 5000 語>の選定

学年が進むにつれて教科学習が困難になる理由の一つに、在籍学級での日本語母語話者との日本語力、とくに顕在化しているものとして理解語彙の差があげられます。日本語母語話者の理解語彙が 12 歳で約 25,000 語、高校新生で約 30,000 語という調査がありますが、非母語話者の生徒、ことに非漢字圏の生徒の理解語彙は、それと比較するとあまりに少ないのです。学習言語能力の育成には文法的知識なども重要であることは十分認識していますが、教科学習に不可欠な読解力は語彙力と高い相関があると中島(2001)⁴によって報告されていることから、まず語彙に注目して、どのような語彙を定着させるべきか考えることを出発点としました。

学習言語能力と生活言語能力の峻別が不可能であることから、演繹的に言葉のリストを構築するのではなく帰納的な事例を重視し、「学習者が、教科学習において、情報を収集し、内容を比較・分析し、推測や統合する、その思考活動に必要な語」と考えられる語彙を、日本語指導者 20 数名に、これまでの経験や国研などの研究の成果を踏まえて選んでもらいました。その結果を集計し、統計的処理をして、約 5000 語を選び、<学習語彙>として、2004 年 8 月の日本語教育国際研究大会で発表しました。(選定過程の詳細は、「V. 「学習語彙 5000 語選定過程とその分析」)。

3. 対訳用例文付き学習語彙集の編集方針

新出語彙を定着させ、運用できるようにするためには、その文脈が大切であることから、用例文を日本語と母語とで示す『学習語彙集』を作成することをしました。用例文は当初、中学校教科書のテキストから、「専門用語自動抽出システム“Term Extract”」や「形態素解析システム 茶釜」などを使い、コンピュータによって抜き出すことも考えましたが、その単語の最も基本的な意味で使われている用例文を選ぶのは最終的には人間なので、自分たちで作例し翻訳していくことにしました。翻訳し始めるとその単語の意味領域や語構成の違い、そして文化的な違いによって、どうしても自然な文に訳せないものも出てきましたので、日本語ネイティブ翻訳者と中国語ネイティブのチェック者の二つの視点から用例文を変更していきました。

2006年3月に試用版を出し、お使いいただいた方々からもさまざまなフィードバックを受けましたので、それを活かし改訂しました。試用版と大きく異なる点は、初級の基本動詞約50語、カタカナ語十数語を増やし、日本語と中国語で同じ漢字（簡体字ではあるが）を使っていて、意味領域もほぼ同じ語彙を割愛したことです。二つ目の相違点は、「する動詞」とその語幹である名詞で、そのどちらか一方の運用領域が限られているものは、広く使われている用法のみ※を付して残し、もう一方は削除したことです。三点目は、「ナ形容詞」を学校文法用語である「形容動詞」とし、語幹の漢語の名詞用法が限定的な場合は※を付して、その用例文も割愛しました。また、生徒自身から「ルビを大きく」、「社会や理科の教科学習の中国語訳を」と要望があり、17ページに増やしました。

生徒一人一人が、毎日の学校生活の中で学びの喜びを味わえるような教材がほしいという思いから、この副教材『学習語彙集』の編集と翻訳に着手しました。語学は地道な努力が必要です。すぐに、その成果は見えてこないかもしれませんが、母語保持/伸張を兼ねた確かな言語能力と学力を身につけるため、この『学習語彙集』で日本語の意味と使い方を確認し、語彙を増やし、読解力をつけ、自ら思考する言語能力を育成できるよう期待しています。

また学習面だけでなく、生徒が家庭でこの例文を話題にし、母語で母語や母国の文化について家族と話すきっかけになったら望外の喜びです。努力しなければ弱まっていく母語力を日本語学習に役立て、かつ伸張させ、二言語二文化を持った大人に成長して行ってほしいと願っています。このテキストをお使いになる学習者が、将来、二つの言葉/文化を理解する人間として、国際社会で活躍し、本物の多文化共生の社会を体現してくれることを強く願ってやみません。

特定非営利活動法人 中学・高校生の日本語支援を考える会
代 表 樋口万喜子

¹ 「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成17年度)」の結果 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06042520/001.htm

² 勝原亜希子(2001) 広島大学大学院 修士論文「中国帰国児童の教科学習支援に関する研究 ―算数科を中心に―」

³ 有本昌代(2004)「公立中学校における 日本語指導が必要な外国人生徒のための『JSLカリキュラム』開発・実施・分析 ―JSL内容重視クロスカリキュラム開発への取り組み」平成16年度 財団法人言語教育振興財団研究助成金による研究報告書

⁴ 中島和子/ロザナ(2001)「日本語獲得と継承語喪失のダイナミックスー日本の小・中学校のポルトガル語話者の実態を踏まえて」

<http://www.colorado.edu/ealld/atj/ATJ/seminar2001/nakajima.html>